

視聴覚教材を効果的に用いる国語科授業

大石 枝里

一 はじめに

大学三年次の教育実習において、宮沢賢治の作品「やまなし」を扱った国語の授業を担当した。「やまなし」は美しく幻想的な表現が多用された作品なのだが、その表現の多くが抽象的であったり比喩であったりするがゆえに、小学六年生の子ども達にとって情景を想像することは困難であった。そこで、授業の最終回において、作品の情景をカラーセロファンとOHPフィルムを使用して作成し、OHPで投影した。子ども達の反応は良かったのだが、授業研究会では、最終回の授業で、また授業時間の後半で、という提示のタイミングは子ども達の学習過程において良いものだったのか、情景をスライドとして提示すること自体良いことだったのか、といった疑問点が挙げられ、視聴覚教材の使用に対する自分の安直な

考えと、国語科の授業において視聴覚教材を使用することの難しさを感じさせられた。

視聴覚教材は、授業を進める上での補助として、学年や科目を問わず広く使用されている。コンピュータによる教材開発の発展がめざましい今日でも、紙芝居やペーパーサート、スライドなどの基本的な視聴覚教材は、あたたかみがある、とか、低学年児童向けである、子ども達も自作でき易い、といった観点から、欠かすことはできない。しかし、視聴覚教材は補助的な目的の強いものであって、必ずしも授業において必要なものとは限らない。子ども各々の個性的な想像や考えを重要視する国語科では特に、子ども達の考えや理解を助けるという目的で使用されるはずが、使用する視聴覚教材の種類や使用のタイミングによってはその目的を簡単に遂げすぎたり、逆に戸惑わせてしまったり、ということになりかねない。

以上の経験や問題意識より、本稿では、視聴覚教材を国語科授業に効果的に取り入れるために、視聴覚教材の特性と国語科にふさわしい種類を明らかにして、視聴覚教材を活用する国語科授業を構想し、提案するものである。

二 視聴覚教材とは

本稿では、視聴覚教材を「動の視覚教材」、「静の視覚教材」、「聴覚教材」の三種類に区分する。

(一) 動の視覚教材

絵や図、映像等が動く様子を見せる目的で使用することを「動の視覚教材」と位置づける。

まず、動画を放映する形式の視覚教材として、ビデオ、映画、テレビ番組、授業風景や子どもの様子等の録画映像が挙げられる。ビデオは学習用のものが使用されることが多く、映画は、授業内容を含んでいるものを教師が選び出し、使用する。テレビ番組は、子どもに見てほしい番組を、それが放映される時間帯の授業時間を使って見せる方法と、番組を予め録画したものを授業内でビデオ教材のように使用する方法がある。

次に、劇を演じる形式の視覚教材として、ペープサート、人形劇、影絵劇が挙げられる。これには教師が子ども達に対して演じる場合と、子ども達が、仲間や保護者に対して演じる場合とがある。

更に、絵図を動かす形式の視覚教材として、フランネルグラフがある。フランネルグラフは、起毛織物である

フランネル布の、重ねると布同士がはりつく性質を利用したもので、絵図等を描いて切り抜いた厚紙の裏側にネル片をはり、それをネル布をはったボードに接着させて提示する教材である。厚紙を切り抜いた絵図そのものが動くわけではないが、布同士の着脱が容易であり、絵図を動かしながら提示することができるという特長から、動の視覚教材として区分することができると考えた。

(二) 静の視覚教材

絵や図・立体の色・形、また文字等を見せる目的で使用するものを「静の視覚教材」とする。

平面的な視覚教材として、図表、グラフ、ポスター・漫画・教科書の挿絵等を含めた絵、それらを掛け軸のように表装した掛図、紙芝居、さらに地図、写真、新聞記事が挙げられる。図表、グラフ、掛図、地図、写真は、授業用の既製のものが用いられる場合が多いが、これらは授業の内容に合わせて独自に自作することができる。また立体的な視覚教材として模型、標本、地球儀が挙げられる。

(三) 聴覚教材

想像力をはたらかせるために音声のみを聞かせる目的

で使用するものを「聴覚教材」とする。

音声のみの教材としては、ラジオ放送、音楽や朗読等の既製CD・カセット、授業風景や子どもの声を録音したCD・カセットが挙げられる。ラジオ放送は、テレビ番組同様に、子どもに見てほしい番組を、それが放送される時間帯の授業時間を使って聞かせるといふ方法と、番組を予め録音したものを授業内でカセット教材のように使用するという方法がある。

『明治図書講座 視聴覚教育二 聴覚教材編』（一九五九年 明治図書刊）では、これらの教材を内容によって分類している。それによると、分類は次の五項目になっている。

- 一. 話を主とするもの
- 二. 劇形式によるもの
- 三. 音楽を主とするもの
- 四. 現場録音によるもの
- 五. 音の標本といふべきもの（種々の楽器の音色、鳥や虫の鳴き声など）

（同上書・二二二頁）

以下に、視聴覚教材の種類を、筆者が表にまとめたも

のを示す。

	動の視覚教材	静の視覚教材	聴覚教材
目的	絵や図、映像等が動く様子を見せる	絵や図・立体の色・形、文字等を見せる	想像力をはたらかせるために音声のみを聞かせる
類型	①動画的放映 ②演劇 ③絵図を動かす	①平面的なもの ②立体的なもの	①話 ②放送劇 ③音楽 ④現場録音 ⑤音の標本
主な教材	①映画 ビデオ テレビ番組 授業風景・下どもの様子等の映画映像 ②パノラマ 人形劇 影絵劇 ③フランクフルト	①図表 グラフ 絵（ポスター・写真、教科書の挿絵等を含む） 標本 地図 写真 新聞記事 紙芝居 ②模型 標本 地球儀	①ラジオ放送 朗読 ②放送劇 ③歌謡 演奏 ④授業風景・子どもの声等の録音 ⑤楽器の音色 鳥や虫の鳴き声

表類型と主な教材の番号は対応

視聴覚教材は子どもにどのような効果をもたらさしうるのだろうか。『明治図書 講座 視聴覚教育三 教科指導編』（一九六二年 明治図書刊）では、視聴覚教材の長所は次のようにまとめられている。

- 一. 生きた経験を与える。
- 二. 複雑な資料を簡易化して見られるようにする。
— 肉眼では見られないものや多くの経費をかける必要と経験できないようなものを容易に見

聞させる。

三、地理的に遠いところにある事物や事件を、速やかにかつ正確に教室の中にもちこむことができる。

四、過去の事件、歴史的な現象を現在のものとして見聞させる。

五、時間を節約することができる。

(同上書・十六頁)

これらの長所は主に、経験、という観点からまとめられている。「一、複雑な資料を簡易化して見られるようにする。」「三、地理的に遠いところにある事物や事件を、速やかにかつ正確に教室の中にもちこむことができる。」「四、過去の事件、歴史的な現象を現在のものとして見聞させる。」「の三点は全て、実際には、または教室においては不可能な経験を、間接的にさせることができる、と言ひ換えることができ、「一、生きた経験を与える。」に集約することができると言へる。

また、浜喜代治は著書『手軽に自作・利用できる視聴覚媒体』(一九六八年 第一出版刊)の中で、視聴覚教材を「視聴覚媒体」と表現し、その効果について次のようにまとめている。

- ① 理解、修得の速度を早める。
- ② 印象を深くし、修得を確実にする。
- ③ 受け手の気分を転換し、和らげる。
- ④ 注意力を集中する。
- ⑤ 意欲を起こさせるキツカケになる。

(同上書・五頁)

こちらは主に、学習、という観点でまとめられている。

「①理解、修得の速度を早める。」「②印象を深くし、修得を確実にする。」「の二点は「早く確実な理解・修得」とまとめることができ、「③受け手の気分を転換し、和らげる。」「④注意力を集中する。」「⑤意欲を起こさせるキツカケになる。」「の三点は「学習への気持ち、注意力、意欲の喚起」とまとめることができる。

更に、『日本語教育指導参考書二一 視聴覚教育の基礎』(野田一郎編 一九八八)では、視聴覚メディアの効果が次のようにまとめられている。(なお、※以下の注は筆者による。)

- (1) 学習に対する興味を喚起し動機づける
- a. 好奇心を満足させる

b. 自己学習活動を刺激する

c. 注意力を集中統一する

(2) 知識・情報、技術の伝達を正確にする

a. 概念を具体化する

b. 行動模倣の素材を提供する

c. 言語の相違を超越して伝達する

(3) 集団学習における個人差を克服する

a. 経験の個人差を減少させる

b. 個々の知覚表象の一斉化に役立つ

(4) 思考活動を正確にする

a. 思考のための素材を提供する

b. 正しい概念を与える

c. 概念の形成を助ける

(5) 記憶を強化し持続させる

(6) 学習経験を整理・総合する

(7) 教室学習の限界を克服する

a. スケールの大きい経験の学習

b. 極めて微小な現象・事象、機構、運動の学

習

c. 緩慢な現象の学習↓※種子の発芽の様子や人類の

進化等、長い時間・年月をかけて起きる現象

d. 高速な現象の学習↓※物体の落下運動の様子等、

瞬間的に起きる現象

e. 非常に複雑な機構、現象の学習

f. 時間と場所を超越した学習

(8) 望ましい態度や習慣を形成する↓※学習に向かう

態度、また、学習の習慣、の意

(同上書・二四頁)

ここでは、経験、学習、という前出の観点両方によって効果がまとめられている。「(1) 学習に対する興味を喚起し動機づける」、「(8) 望ましい態度や習慣を形成する」の二点は「学習を動機づけ、意欲を喚起し、習慣化する」と、また、「(2) 知識・情報、技術の伝達を正確にする」、「(4) 思考活動を正確にする」、「(5) 記憶を強化し持続させる」の三点は「確実な学習活動」と、そして「(3) 集団学習における個人差を克服する」、「(6) 学習経験を整理・総合する」、「(7) 教室学習の限界を克服する」の三点は「教室での共通・間接的经验」とまとめることができよう。

以上、三冊の文献からの引用を筆者がまとめた、ア)力を以下に示す。

ア. 生きた経験を与える

- イ. 早く確実な理解・修得
- ウ. 学習への気持ち、意欲、注意力の喚起
- エ. 学習を動機づけ、意欲を喚起し、習慣化する
- オ. 確実な学習活動
- カ. 教室での共通・間接的経験

これらを更に、次の三点にまとめた。これが、筆者の考える、視聴覚教材のもたらす三大効果である。

視聴覚教材の三大効果

I. 教室における間接的経験の実現

- 複雑なもの、肉眼では見られないもの等を見せる。

- 時間や場所を越えて疑似体験させる。

- 子ども達に共通の経験をさせる。

II. 正確・確実な学習活動

- 学習内容を確実に印象づけ、正確に理解・記憶させる。

- 子ども達の理解の個人差をなくす。

III. 学習に対する意欲・集中力の喚起

- 学習を動機づけ、興味・関心を喚起する。

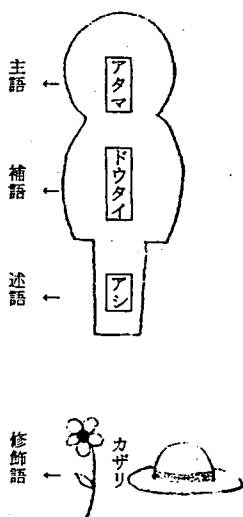
- 学習に向かう気持ちを整え、注意を引く。

これらの効果を認識しておくことによって、視聴覚教材の使用が必要な場面、また、そこでの視聴覚教材の適切な使用方法等を理解することができるだろう。そしてそれが、教師の望む効果を子どもにもたらすことにつながるのである。

三 国語科授業における視聴覚教材の特性

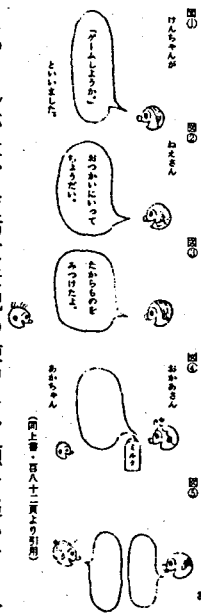
視聴覚教材は様々な場面において用いられているが、国語科の授業では、何を、どのように用いるのが適切なのだろうか。国語科は、「話す・聞く・書く・読む」の四つの言語活動を軸として成り立っており、これまではそのうちの「書く・読む」に重きが置かれてきた。よって、他のどの教科よりも文字というものに触れる時間が多く、文字によって成立している教科であったといっても過言ではない。しかしそれは逆に、文字以外のもの、つまり絵や図や写真にはあまり触れなかったということになる。ただ、文字のみによる授業というのは非常に分かりづらく、面白みに欠ける。教科書の文章を読み、或いは朗読を聞き、板書されたことを写すだけでは、文章や詩の情景の想像を膨らませることなどは特に困難であるよう

に思われる。文章の要約や文法なども、文字のみでなく絵や図があれば、理解が容易になるのではないだろうか。愛原豊著『小学校 絵を見て学ぶ国語教室』(二〇〇一年 友月書房刊)掲載の実践では、小学校五年生の、単位文の構成要素を学ぶ授業において、主語を「アタマ」、述語を「アシ」、補語を「ドウタイ」、修飾語を「カザリ」とする、次のような人体略図「文ちゃん」で表している。



「文ちゃん」は、非常に簡単な人体の簡略画である。これならば余計なところに子どもの興味が逸れるような心配もなく、絵の苦手な教師でも容易に描けるであろう。この絵を使用して、愛原は子ども達が親しみやすく分かりやすいように、文法指導を行なった。文字中心となりがちな国語の授業だが、そんな授業を分かりやすく、また楽しくするために、国語科授業においても視聴覚教材は必要なものであると言えよう。

このような文法だけでなく、作文や会話文の学習等の、一般に「言葉の学習」と言われるような内容は、文法同様、難しく面白みが少ない。愛原豊著の同上書から、小学校二年生対象の、会話文表記を学ぶ授業における実践を取り上げる。子ども達は、かぎを用いて会話文を表すことを正しく理解できていない。愛原はそこで、次のような漫画を用いた。



このまんがは、会話文表記の練習を、順を追ってさせることができる。まず図①で、ふきだしの中の会話文にかぎを書き込ませ、それを作文用紙に写させる。次に図②で人物と会話の内容を教師が決め、あとは自由に表現させる。図③では会話の内容のみを、図④では人物か、その場の状況だけを教師が決め、あとは自由に表現させる。最後の図⑤は教師からは何も決めず、全て子どもに工夫させ、考えさせる、というものである。これらを用いれば、かぎをつけなければならない会話文がどれなのかを、視覚的に理解することができる。

このような、口で説明することの難しい言葉の学習には、理解を助ける視聴覚教材が必要となる。言葉の学習のみにとどまらず、どんな教科学習においても、説明のみで理解させることの困難な内容を扱う場面には視聴覚教材が必要となるであろう。

確実な理解をさせなければならぬ場面にも視聴覚教材が必要である。確実な理解をさせなければならぬ場面というのは、作者の生まれ故郷や都道府県の場所等の地理的な内容、また、実在する生物の様相等の理科的内容や、聞きなれない名前の色等の美術的内容といった、他教料的内容を取り扱う場合であることが多い。確かに、社会や理科や図工の授業では視聴覚教材が多用される。国語科授業においても、そういった他教料の内容を扱う際に、それらの教科の授業に倣って視聴覚教材を使用すべきだろう。

次に、先に述べた国語科授業における視聴覚教材の必要な場面を基に、国語科の授業に適した視聴覚教材を考える。まず、口での説明が難しい内容を伝える場面では、視聴覚教材の中に多少なりとも文字が必要であるため、文字と絵・図とを併せて提示することができるものが適している。また、視聴覚教材を多用している他教料的内容を伝える場面では、それら他教科の授業において使

われているものに倣った視聴覚教材を使うのが適当であろう。例えば前項の例で言えば、作者の生まれ故郷や都道府県の場所を伝えるためには地図を、生物の様相や色を伝えるためには標本や写真を用いるのがよい。これまでの内容をまとめると次のようになる。

- ① 口での説明が難しい内容を扱う場面（文法、作文等）↓フランネルグラフ、絵または掛図が適する
- ② 視聴覚教材を多用している他教料的内容を扱う場面（社会科、理科、図工科等）↓地図、標本、写真等が適する

四 視聴覚教材を活用した国語科授業の提案

視聴覚教材は、授業に用いるために創り出すものである。その創り手には、教師と子どもの両者ともがなることができる。筆者は考える。まず、子どもが創り手となる場合、どんなものであれば子どもの手で創り出すことができるのだろうか。

『新学力観に立つ「音声言語教材」の支援発問』（新潟国語研究会著 一九九五年 明治図書刊）より、小学校四年生を対象とした実践例「本の紹介ビデオを作ろう」

を、参考として抜粋する。この実践は、教師の「自分が読んで面白かった本をみんなに紹介しよう」という発案の下、子ども達が一人一冊の本を選び、実物を見せながら紹介する様子をビデオに収め、それを自分たちで鑑賞したり転校した友に送ったりする、というものである。

この活動は、ビデオの操作方法を教えれば子ども達だけで進めることができ、本の選択や発表のメモ書き、リハール等を通して子ども達がお互い知恵を出し合ったり、良いところ・直したほうがよいところを言い合ったりする楽しさ、協力の大切さを実感することもできる。そして、出来上がったビデオは全員で見ると、教材としての性質も十分に持っていると言える。

同上書より、もう一つ実践例を抜粋する。こちらは小学校一年生を対象とした、「こんなものがあるよーぼくのわたしの通学路」という実践で、自分の通学路にはどんな面白いものがあるか教え合おう、という教師の発案の下、子ども一人ひとりが自分の通学路の絵を描き、それを見せながら仲間の前で発表をする、というものである。これは生活科の授業における実践なのだが、国語科の授業にも応用できる。地図や年表は既成のものもあるかと思うが、前項で触れたように、仲間の創ったものは、子どもたちにとっては既成のものよりも興味深いだろう。

また、スライドやOHPを作成するのは子どもにとって少々困難かもしれないが、絵や年表などの手書きのものであれば、子どもでも難なく創ることができよう。

次に、教師が創ることのできる視聴覚教材について述べる。視聴覚教材には様々な種類のものがあり、教師には少々手間のかかるものでも創れるくらいの器用さが備わっている。とはいえ、高度な技術を要するものや、多大な時間を費やさなければならぬものは、教師が創るのには向かないであろう。

『新版 視聴覚教材を創る』（櫛田馨・土橋美歩・中澤茂夫著 一九九三年 学芸図書株式会社刊）には、視聴覚教材を自作する際のポイントが三点挙げられている。以下に引用する。

- ① 費用や道具があまりかからないで目的が果たせること。
- ② 他人の手をあてにせず、自分一人で手軽にやれる、簡単なメディアを捜して、それに決めること。
- ③ 技術の優劣の差があまり顕著にあらわれず、素人でもでき上がりがよくなるもの。

（同上書・十七頁）

この観点から、既載の、視聴覚教材の種類の表を見て

みる。「動の視覚教材」では、授業風景・子どもの様子等の録画映像を編集した自作ビデオ、ペープサートやフラインググラフが、あまり時間をかけずに創ることのできる教材と言える。また「静の視覚教材」では図表、グラフ、絵、掛図、地図が適しているだろう。ただ、絵は教師各々によつて得手・不得手があるため、苦手な教師にとつては時間のかかる作業となりうる。「聴覚教材」では教師の朗読を吹き込んだり、ビデオ教材同様に授業風景・子どもの声等の録音を編集したりした自作カセット教材を創ることができる。

では、これまでの論述を基に、実際の国語科授業を想定し、効果的な視聴覚教材と、それを使用した国語科授業案を構想する。

まず、光村図書の『国語 六年(上) 創造』(平成十八年度版)より、教材文「森へ」(星野道夫著)を取り上げ、この内容に則して、国語科授業に効果的な視聴覚教材を考えていくことにする。この文章には数多くの動植物が出てくる。聞きなれない名前も多いが、それらには注が付いている。また、著者が撮影した風景や動植物の写真も九枚載っており、注と写真を見ながら読んでいくと、筆者の頭の中に壮大な森の風景が広がるのを感じた。この教材を用いた授業を構想するならば、やはり情

景を思い浮かべ、その美しさや自然の壮大さ、生命の存在を実感できるようなものになりたい。そして、次の学習につなげることができるよう展開にしたい。

そこで筆者は、この教材を扱う授業に用いることのできる、次のような視聴覚教材を提案する。それは、身近な自然の様子と、そこで見ることのできる動植物を写した写真である。注のみが付けられたそれら動植物の写真を用意し、実際にどんなものなのかを理解させることも、子どもにとつては興味深い経験となるだろう。ただ、注は十分詳しく書かれており、想像することも不可能ではない。更に、それらの写真を提示しても「なるほど。」で終わってしまう、次の学習には発展しない可能性が高い。しかし、身近な自然や動植物の写真を提示すれば、「自分たちの身近にもこんな自然や生命があるんだなあ。」と興味を持ち、それについて詳しく調べたり、実際に行ったりにしてみたい、と思わせることができるだろう。そして、そのような子どもの興味ややる気を生かし、何かの形で次の学習にもつなげることができよう。

また、この視聴覚教材は実際に出かけて行き、写真を撮影してくる必要があるため、教師の自作教材ということになる。「先生が休みの日に実際に行つて撮つてきました。」という一言で、先に述べたような手創り教材への親

しみを、子どもに感じてもらえるという効果も期待でき
そうである。

次に、この視聴覚教材を用いた授業を構想する。対象
は小学校六年生。授業構想は一枚時分とし、その前後の
展開については仮定とする。

教材名「森へ」（星野道夫 文・写真）

(1) 前時までの学習と子どもの姿

前時までに子ども達は、本文を通して何度か読んでき
ており、新出漢字や文章のあらすじを押さえることができ
ている。また教科書の注と写真を本文と照らし合わせ
ながら読み、また写真の載っていない生き物の様相を、
教師が提示した写真によって知ったことで、文章の情景
を思い描くこともできており、単元としては終盤である。

(2) 本時のめあて

自分たちの身近にある自然や生き物の様子を知り、興
味を持つことによって、詳しく調べたり実際に出かけて
行ったりしてみたい、といった、新たな学習に対する意
欲を喚起できるようにする。

(3) 授業展開

（●は教師の指導内容、○は、予想さ
れる子どもの反応を表す。）

● 前時までに、注と写真を照らし合わせ、情景を想
像しながら読んできたことを確認する。その後全員
で一文ずつ読んでいく。その際、情景を思い浮かべ
ながら読むように言う。

● 本文の、どの部分が気に入った、または印象深い、
と感じたかを問い、発表させる。

○ ミルク色の世界、というのが、かわいい感じで
気に入った。

○ 枝から着物のように植物が垂れ下がっている、
というのが、写真を見たら本当に着物のように見
えたのすごいと思った。

○ 子グマが木の上で寝ていた、というのが印象的
だった。上を見たらクマがいた、なんていうこと
があったら、とてもびっくりすると思う。

● 発表された、気に入った、または印象深かったも
のや場面を、実際に見たり体験したりしたことが
あるかどうか問う。

○ 霧は見たことがあるけど、ミルク色だと思った
ことはない。
○ ないと思う。

○ 近くに動物なんて住んでいない。

● 本文に出てくるような、規模の大きい自然や野生の生き物は見られなくても、身近にも自然や生命はあるということを言い、教師が撮影してきた写真を、実物映写機を使って提示する。この時、ただ提示するのではなく、本文の調子に合わせた写真の説明を考えておき、読みながら提示する。

○ これはどこで撮った写真なんだろう。

○ 身近にもこんな植物があるんだ。

○ あ、近所の野良猫だ。

● 感想を聞き、そこから次の学習内容にできそうなことを取り上げ、提案する。

○ どこに行ったらこういう自然があるのか知りたいと思った。

○ 先生の説明がおもしろかった。

○ 野生の動物はいなくても、猫とか鳥はいるんだなあと思った。

(4) 今後の学習について

例えば前述のような感想が出されたとすると、次のような学習が考えられる。

○ どこに行ったらこういう自然があるのか知りたいと

思った。

○ 野生の動物はいなくても、猫とか鳥はいるんだなあと思った。

↓ 自然や生命を探しに外へ出かける。

○ 先生の説明がおもしろかった。

↓ 写真に撮ってきて、写真の紹介文を書いて発表会をする。

一つ目の自然や生命を探しに外へ出かける活動のみでは、理科や総合的な学習等、他教科的な学習になつてしまうが、二つめの、紹介文を書き発表する活動をプラスすることにより、国語科的な学習となりうる。子どもの撮った写真は、子どもが自作した視聴覚教材ということになるため、本章第一節第三項で述べたような効果が期待でき、更に発表の場でも実物映写機を使用する必要があるため、子どもが自分で視聴覚機器を操作する、よい経験ともなるだろう。

五 おわりに

本論文を書くにあたり数多くの文献に触れたが、その中で、あることに気が付いた。それは、本論文で扱った、コンピュータを除いた視聴覚教材に関する、新しい文献

校現場で更に追及していきたい。

【参考文献】

『明治図書講座 視聴覚教育二 聴覚教材編』一九五九年 明治図書

『新版 視聴覚教材を創る』樹田啓・土橋美歩・中澤茂夫著 一九九三年 学芸図書株式会社

『明治図書講座 視聴覚教育三 教科指導編』一九六二年 明治図書

『日本語教育指導参考書二一 視聴覚教育の基礎』一九九五年 国立国語研究所

『手帳に自作・利用できる視聴覚媒体』浜喜代治著 一九六八年 第一出版

『小学校 絵を見て学ぶ国語教室』愛原豊著 二〇〇一年 友月書房

小学校教科書『国語 六年(上) 創造』光村図書刊 平成十八年度版

『新学力観に立つ「音声言語教材」の支援発問』新潟国語研究会 著 一九九五年 明治図書

(おおいし えり 長野県小諸養護学校)

の少なさである。つまり、これまで学校現場で多く用いられてきた視聴覚教材が、コンピュータ教材に取って代わられようとしているのである。確かにコンピュータ教材は非常に多くの活用の可能性を秘めており、教師にとっても子どもにとっても魅力的である。しかし、そんなコンピュータ教材を敢えて扱わなかったのは、筆者の中に、コンピュータ教材の過剰な活用によって起こりうる、教師と子どもとの間の距離の広がりに対する強い懸念があるからである。

本研究において、視聴覚教材に関する様々な事柄を見出してきたが、それら多くの内容の中でも筆者にとつて一番印象深かったのは、視聴覚教材が、教師と子どもとをつなぐ役割を果たす、ということである。授業において、視聴覚教材を提示すれば子どもは興味を示す。教師が分かりやすい説明を加えれば、その興味は増す。それが手創りであったとすれば、興味は更に増すことだろう。興味が増幅するに伴って、教師と子どもとの距離も少しずつ近づいてゆき、距離の近づきは、教師と子どもが同じ気持ちで取り組める、よい授業を生む。教師の介在を必要としないようなコンピュータ教材には、そのようなよい流れは生み出せないだろう。視聴覚教材を活用し、授業により流れを作り出すということについて、今後学